



グリーンエージ オンライン アカデミー(GOA) へのご招待

GOA 初代学長・農学博士 進士 五十八

一般財団法人日本緑化センター(会長・矢嶋 進)は1973年の設立時より、緑とオープンスペースと自然共生社会の実現に向けたトータル・ランドスケープ創出を目指して、「政策・計画・技術・運動の総論と各論」を産官学連携と多方面の専門家の知と方法の学際的業際的運営によって社会に貢献してきた。この度のオンライン配信事業もその延長線上にある新たなチャレンジである。

さて、この度は長年つき合ってきた日本緑化センターから私に「グリーンエージ オンライン アカデミー」初代の学長を引受けて欲しいとのこと。私は母校東京農業大学の第10代学長、まもなく退任するが第二のふるさと福井県立大学第5代学長を務めたが、それとはちがい何とも気楽な学長だから即お引受けした。でも、それだけではない。年来の私の思想に合うし、グローバルな視点からみても大切な事業だと考えたからである。

with & afterコロナのニューライフスタイル、ステイホームとリモートワーク時代への対応。また地球社会的要請「SDGs」、17のターゲットのひとつ「質の高い教育をみんなに」へ直接応えられる財団法人としての社会貢献方策にほかならない。

財団法人結成の1973年以来、日本緑化センターは「工場緑化」など産業界が推進するニューファクトリー運動、日本の文化的景観のプロトタイプ「美しい海岸林・日本の松原」の保全とその技術的サポートを目指す「松保護士」、「保存樹木・老樹名木」の保存と保育のための“樹木医”、さらに「小さな自然から大きな自然まで広範な自然再生活動」のプロモーターである“自然再生士”など、さまざまな専門資格取得のための技術者養成を目指してきた。

これらの研修会や講座は、各界でスペシャリストとして活躍する方々を支援し、また学会と共に CPD 制

度を支えるなど大きな役割を果たしてきた。

私自身もそうした場での講師をつとめ、参加者の質問や学びの真剣な姿勢に熱いものを感じることも度々であった。専門家、すなわちプロフェッショナルが本気でスペシャリストとしてのスキルアップを目指すのは当然といえば当然である。

しかし、プロが相手にするテーマが「緑のまちづくり」であったり、「SDGs や生物多様性」近年では「カーボンニュートラル」シフトへの政策的転換の話題ともなれば、私がかねてより提唱してきた“環境学生”(この名称は、全学的に環境教育をすすめる東京農大として商標登録済)や“環境市民”(拙著『環境市民とまちづくり』、第1巻自然共生編、第2巻環境共生編、第3巻地域共生編、ぎょうせい、2002～2003)のように、環境の世紀に生きるすべての学生や市民にも、その深め方を異にするにしてもその背景への理解、基本的な思想や拙著『グリーン・エコライフ』(小学館、2010)の生活態度は共有されるべきものであろうと考える。

古くは公害問題、都市問題、農薬、水質汚濁、環境ホルモンにはじまり、近年の代替エネルギーや海洋プラスチックまで、おおよそ一般市民、生活者の理解と行動変容なくして問題解決は困難なほど、人間活動の負荷は地球の環境容量を大幅に超えている。

20世紀、環境問題が深刻化するなか日本緑化センターは、緑の時代：グリーンとエコロジーの時代の実現を目指すべく機関誌を『グリーン・エージ』としてスタートした。現実の地球社会は、相変わらずグリーン・エージとは程遠い。いまこそ日本緑化センターが目指すべきは、日本の自然共生時代への国民運動に向けた啓発推進プログラムの充実、さらには地球環境問題解決への基本方向や指針を提示できるシンクタンク機能の強化ではなからうか。

地球社会はいま CO₂ 削減に向け各国共、政治家も経済人も、自然に疎い人文社会学者までも“フューチャー・アース”を掲げて声高である。脱炭素革命を標榜して各国が競うハード・ソフト、長期・短期の政策やプログラムは私などの理解を超えるほど混乱気味でさえある。

しかし私には、そうした施策の根本に、大気中の CO₂ を吸収する地球上唯一の化学反応式は、グリーン：葉緑体における光合成であること。次いで炭素を固定しストックできる最大最適なものにはグリーンな森林であり、ウッドファースト木材の活用であるという2つのことが、十分理解されていないかに見える。

炭酸ガス吸収の光合成や炭素固定の木材活用の推進方策などは当然すぎる施策で、余りに当然すぎて地味で脚光を浴びることはないのだろう。が、しかし子どもにもわかる根本中の根本的事項である。「緑」と「グリーン」の本質とそのエイジ（時代）の重大性について、誰もが改めて自覚したいものである。

奇しくもこの度のプログラムを日本緑化センターは「グリーンエイジ オンライン アカデミー」としている。私もかつて「グリーン・アカデミー Green Academy」（正式には、東京農業大学成人学校）の運営に参画。カリキュラムを組み、「50 歳からの花と緑の学校」というキャッチコピーを考案し、ポスターも制作した。校歌の公募と、選者に『サラダ記念日』の俵万智さんを招いたことも懐かしく思い出す。

グリーン・アカデミーは、大学所在地世田谷区から「区民に対する土と農に親しむ生涯学習」の舞台を要請されたため、造園と園芸系の教員が授業や実習を指導するというもの。

グリーン・アカデミーの生徒さんは世田谷区という土地柄もあってか医者や弁護士など教養人も多く、たとえば私が世界の名園のスライドショーを講じたとき等、ヴェルサイユ宮苑は当然として、その原型にあたる大蔵卿（財務大臣）ニコラ・フーケのヴォー・ル・ヴィコント城を訪れている生徒さんが複数おられたり、一週間しっかり授業とクラブ活動が組まれるがその出席率の高さも、美術部の作品の見事さにも驚いた。なかには翌年から大学の私の講義をも聴講する生徒さんも

おられ、その熱心さに感動もした。

そして気がついた。やっと授業と単位をクリアする大学生よりも、強制もされないのにグリーン・アカデミーに学びたくてやってくる成人学校生の熱心な学びの姿勢に。これぞ本来の大学のあるべき形と、つい力が入ってしまう自分であったことに気づいたのだ。

それは、全国各都市を訪れた「緑化講演会」でも実感した。私の言葉にうなずき反応する聴衆、そしてとても良かったと頭をさげる市民も。そんななか後、私が始めた日本園芸福祉普及協会や美し国づくり協会など NPO 活動にも参加してくれた常連もいたのである。

学校教育に対して、こうしたイベントは社会教育といわれる。文科省も生涯学習局までつくってすすめているが、プロの技術者の CPD とはちがって、このような市民のための生涯学習が、学ぶ楽しさを心からエンjoyする社会教育プログラムとして極めて重要であることを、私はグリーン・アカデミー生徒さんたちとの十数年にわたるつきあいから学んだのである。

ここ数年ウィズ・コロナで、集会に出づらくなったシニア世代の県民に対して、私は公立大学の学長として「福井県立大学公開講座」プログラムの質と量の充実をすすめたのだが、これもグリーン・アカデミーの経験があったからである。

本アカデミーは、日本緑化センターの約50年に及ぶ環境緑化への課題と技術講座のストックを十分活用することにとどまらず、環境緑化が担うべきさらなる課題に応える幅広い分野の講座を新規に拡充し、わかりやすく広く社会に発信する。これまでの対面式の講座と異なり、今後は受講者の方が場所や時間を好みに選ぶことができるので、より多くの方が参加できるようになるだろう。講師には各分野の第一線でご活躍の方々にご協力をお願いする予定である。本アカデミーの開校を迎えるにはまだ準備期間が必要であるが、錚々たる講師陣が集結し、どのようなオンライン講座が展開していくことになるのか、今から楽しみである。関係各位の参画とご支援を心からお願いし、ごあいさつと致します。